

生まれた街だから

神戸芸術工科大学 学長
松村 秀一
Shuichi Matsumura

四八年ぶりの神戸

一年前のこの頁では、長年勤めた東京大学を定年退職し、早稲田大学に勤めることになったことを報告させていただいた。ところが、この四月号がお手元に届く頃には私は新たに神戸芸術工科大学で働き始めている。落ち着きがなく、挨拶続きで恐縮だが、これからもどうぞよろしく願っています。

さて、その神戸だが、私にとって生まれ育った街である。途中和歌山に住んだこともあるが、神戸は祖父の代から住んできた故郷である。一九七六年に大学に入学するため東京に出た時には、まさかこんなに

長く離れることになるとは思っていませんでした。神戸に住むのは実に四八年ぶりになる。

この間、住居探しのために何度か神戸の街を歩くことがあったので、一体この半世紀の間に、数多の建設プロジェクトがどれだけこの街の風景を変えられたのかという視点からそこそこを眺めてみた。

そう言えば、四〇数年前にも同じような見方で見慣れた風景を眺めたことがあった。大学一年か二年の時だったと思うが、休みに関西の方に戻り、その帰り道、神戸の住吉駅から国鉄で大阪駅に向かっていった私は、南側の窓際の席に陣取り、一つの変化も見逃すまいという構えで沿線の景色に目を凝らしていた。

ご承知のように、神戸から芦屋辺りにかけては、北に六甲山系が、南に瀬戸内海があり、その間の傾斜地のなかを東西に阪急電車、国鉄（現在のJR）、阪神電車を通り抜ける。南側の窓際に座れば、少し高い位置から海までの街の拡がりを感じられるのだ。

その四〇数年前の車中で私を驚かせたのは、写真の集合住宅群だった。

山を削り海を埋めた

黒く縁取りされた得体の知れない高層建物が、ニョキニョキと何本も立ち上がるその異様な光景。後に



1970年代末に驚いた風景の一変。歴史的な技術提案コンペによる芦屋浜高層住宅群。(背景は六甲山 写真提供：株竹中工務店)

建築学科に進学してからわかるのだが、それは日本建築史上最大規模の政府主導コンペ、「工業化工法による芦屋浜高層住宅プロジェクト提案競技」の成果だった。

主催者は建設省、兵庫県、芦屋市、日本住宅公団、兵庫県住宅供給公社、(財)日本建築センター、協賛が日本開発銀行、住宅金融公庫、全国住宅供給公社等連合会という文字どおり国家的なプロジェクトだった。一九七二年二月八日に官報公示、一九七三年一月末の資料提出に応じたのは二二の企業グループで、半年に及ぶ審査の結果ASTM（竹中工務店、新日鉄、松下電工、高砂熟学の企業グループ）が入選第一位となり、私が見たのは、その案に基づく建設が行われている風景だったのだ。

当時、阪神間にこれほどの超高層集合住宅は他に例がなかったし、これだけ広大な埋め立て地の開発も例がなかった。

この芦屋浜の後は、それと同じように山を削った土を海に埋め立てることのできた土地に超高層建物を

建設するプロジェクトが神戸周辺の何箇所かで実施された。

代表的なものには、一九八一年に「ポートピア」という博覧会で街開きをした、世界最大(当時)の人工島「ポートアイランド」、そしてバブル経済真只中の一九八八年に最初の住宅が完成した「六甲アイランド」がある。ポートアイランドの時のキャッチコピーに「山、海へ行く」というのがあったらしいが、まさにそのとおり。海にも新しい宅地がで

きたが、削った後の山中にも新しい宅地ができた。そうやって神戸市は市域を拡大していったのだ。実は、私の新しい職場、神戸芸術工科大学もそうしてできた西神ニュータウンのなかにある。

変えられぬ地形の本質

その後一九九五年には阪神大震災で多くの土木構造物や建物が倒

壊し、長く復興のための建設が続いた。山中のニュータウン建設と広大な埋め立て地の開発。そして被災地での長期の復興。私が東京で暮らしていた四八年の間には、通常では考えられない圧倒的な量の建設が行われた。だから、風景は大きく変わったはずなのだが、街を歩くと「変わったなあ」よりも「変わらないなあ」という思いの方が強くなる。六甲山と海に挟まれた傾斜地とその間を結ぶ川や坂道。そして、傾斜と直角方向には東西を結ぶ複数の鉄道や幹線道路。プラタモリではないが、この地形が決定的なのだ。建設は一部の地形に触ったがそれはごく僅か。ほとんどは地形に従って行われてきたのだ。

「この街」という平成時代の望郷ソングにこんな一節がある。

（作詞：森高千里）※